

## 岩槻新校準備委員会（第2回） 議事録

1 日 時 令和5年6月14日（水） 午前10時開会  
午前11時35分終了

2 会 場 県立岩槻高等学校会議室

3 出席委員 依田委員長、関根副委員長、長谷川副委員長、大砂委員、石井委員、  
田中委員、渋谷委員、亀井委員、山口委員、手島委員、池田委員、  
真中委員、廣川委員

4 事務局 魅力ある高校づくり課 栗藤、中島、坂本、高辻、橋本

5 協議等 「岩槻新校基本計画骨子（案）」について

依田委員長 それでは協議に入ってまいりたいと思います。それでは資料の1ですね。岩槻新校基本計画骨子（案）と記載のある資料1を御覧いただきたいと思います。複数ページにわたっておりますので、事務局から説明いただいた上で、皆様から御意見を賜りたいと思っております。ページごとに区切って事務局から説明をいただきたいと思います。まず、1ページ目を御覧いただきながら、説明をいただきたいと思います。

事務局 （岩槻新校基本計画骨子（案）のうち課程・学科等、学校規模について説明）

依田委員長 それでは、皆様から意見をいただきたいと思います。資料1の1ページ目の上段の部分ですね。普通科、国際探究科という学科の名前について、また普通科7学級、国際探究科1学級、括弧書きがクラス数ですね。御意見をいただきたいと思います。御意見のある委員はいらっしゃいますか。

関根副委員長 御説明ありがとうございました。学科名について、現在岩槻高校では国際文化科がありますが、新校基本計画検討委員会では、この国際探究科という名前にはいろいろと御意見をいただいたと伺っているのですが、よろしければ簡単に御説明と県の考えを示してもらえれば参考になりますので、よろしく願いいたします。

依田委員長 では、事務局の方から、よろしく願いいたします。

事務局 準備委員会に先立ちまして、教職員及び教育局の職員からなる新校基本計画検討委員会が開催されておりますが、その中の主な御意見として、関根副委員長から御指摘いただいたとおり、例えば、探究という言葉について、普通科と国際探究科となっておりますが、探究は全ての高校生が学ぶべき手法であり、国際に関する学科のみに探究が入っていると、普通科では探究活動をしのではないかという誤解が生じる、といった御意見がありました。更には、岩槻高校の現在の国際文化

科などで、国際交流等を行われている中で、学科を英訳して紹介する場面があるが、国際探究の英単語としてしっくりするものがないといった御意見がありました。そこで、例えば、リベラルアーツという言葉は世界的に認識されている言葉であるため、国際教養のような別の言い方にしてはどうか、といった御意見がありました。事務局といたしましては、全国的には、国際科という学科名がかなり多いことは認識しております。次に多くなると、国際教養科といった学科名が出てくるというのが全国的な傾向ですが、埼玉県につきましては、国際に関する学科は今回初めて設置する学科になりますので、奇をてらうよりはオーソドックスなものを考えて国際。そして、学びの手法として探究的な学びが学習指導要領の中心にありますことから、また基本方針にございますように、この地域の伝統工芸あるいは伝統文化・伝統産業等を海外に発信するという探究活動を進めていくという意味合いで、国際探究という原案にさせていただいたところです。

依田委員長 他、委員の皆様いかがでしょうか。では、事務局から。

事務局 先程申し上げた学科を英訳した場合ということで、事務局には英語に精通する者がいなくて、国際バカロレアなどで使われている単語を拾っていくと、探究は Inquiry という単語ではないかと思っていたところです。ただ、現場の教員からはしっくりこないという御意見もいただいています。例えば、語学の専門の方から語感的には探究とはどういう意味合いなのか教えていただけると有り難いなと思っております。探究にこだわっているわけではないのですが、探究という日本語に合う英語が見つからないというお話もいただいておりますので、事務局から言うのもなんですが、田中委員からその辺りをお伺いできないかと少し思った次第です。

依田委員長 大変恐縮なのですが。

田中委員 私は英語が専門ではないのです。フランス語が専門なので。今、英語の感覚をたぶん聞かれるとは思っていたのですが。少し余計なことを言うと、私の大学でもカリキュラム改正を行おうとしていて、新しい科目を作る際には英語の科目名も用意しなければならないのですが、日本語と英語が必ずしも対応していないことがあって、日本語の感覚とそれを直訳した英語の感覚でずれていることがあります。何に重きを置くかだと思います。直訳であることが大事なのか、外国の方にとって中身を伝えることが大事なのかによって変わってくると思うので。先程の Inquiry については、確かに学科の名前としてはピンとこない気がするのですが。代案がないので、持ち帰って良いですか。後は逆にお聞きしたいのは、普通科の学科名は普通科なのでしょうか。そちらを変えるという選択肢はないのでしょうか。つまり、探究が国際に関する学科にしか付いていないという意見は確かにそうだと思います。それは私の大学でも学科名を決めるときには、このコースは何かをしないのかという議論になるところです。普通科というネーミングの方も何か手を入れることはできるのかということ逆を逆に教えてもらえたらと思います。

依田委員長 では、事務局から。

事務局 ありがとうございます。突然話題を振ってしまい申し訳ございませんでした。確かに、普通科の学科名については、他の新校でも議論になりました。普通科につ

きましては、中教審の、令和の日本型学校教育、という答申で考え方が示されている中で、普通科に少しアレンジを加えた普通科改革をやるべきだという話もあるのですが、現在のところ、基本計画の骨子案としては、普通科のままにしています。もう少し議論が深まれば、普通科ではない学科名を与えることはできるのかなと思います。普通科というのは、普通教育を主とする学科ということになるので、現在の普通科の中に探究活動などを盛り込んで、例えば学際系の学科を作るとか、探究という名前を付けた学科を用意する、そういった取組は全国でも少しずつ広がってきているのですが、埼玉県では今のところそういった学科はありません。十分検討していく中で、普通科改革も大きな議論の観点になるだろうとは思っています。今のところは普通科ということで原案として示させていただきましたが、御意見をいただけるということは大変有り難いことだと思います。

依田委員長 田中委員いかがですか。

田中委員 普通科に代わる案があるわけではないのですが。国際探究科は、この場で今決めるのですか。

依田委員長 あくまで、このあと骨子案をもとに基本計画案を作りますので。いただいた御意見を踏まえて最終的に基本計画の案となってきます。この骨子について、皆様からの御意見によって変えるか変えないかも大きく影響してきます。そういう考え方です。ここで何かはっきり決まるというものではないということです。お願いします。

渋谷委員 委員長のお話を伺って、ここで決まるものではないということでしたので、意見を申し上げさせていただきます。基本方針に、グローバル人材の育成とうたっておりますので、グローバル人材育成科とか若しくは国際人材育成科など、もう少し具体的な、誰が見ても分かるようなネーミングもありかなと感じたところです。直観ですが、探究科というとなかなか難しいイメージになるのかなと感じたところです。グローバル人材育成科、国際人材育成科は今までにないと思いますが、一案かなと感じたところです。

依田委員長 具体的な提案をいただきました。こちらについて事務局はいかがですか。

事務局 ありがとうございます。私たちでは、全国的な学科名については調べ、どのようなバリエーションがあるのかについては見ているのですが、人材育成という表現はこれまで見たことがないと思っています。検討の中で参考にさせていただきたいと思います。

依田委員長 探究は、なかなか難しい響きがあるという御指摘をいただいたところですが、柏陽中学校長の亀井委員から、中学生として探究という言葉が持つイメージはどんなものか。中学生が、この学校・学科で学びたいと思ってもらわないといけないところがあるので、探究という言葉が中学生にとってマイナスに響くようでは良くないなと思いました。その辺りを御意見いただきたいと思うのですが。

亀井委員 私もなんとなく中学生が学科を選択するというところで考えたときに、やはり探究科となると、ちょっと敬遠するかもしれないなというイメージはなんとなく感じました。国際というところから考えると、やはり海外に視点が向いている生

徒やそもそも英語が得意など、そういった自分の力を生かしたい生徒が、まず目先に入るのではないかなと思います。そこに探究という文字が目につくと、中学校でも探究的な学習はやっていますが、自分の進路に直結したところで考えると、なんとなく気難しい感じがして、もしかしたら敬遠するかもしれないなと思いました。

依田委員長 事務局はよろしいですか。何かありますか。

事務局 ご意見ありがとうございます。私たちの検討の過程においては、探究という意味合いは、確かに中学生にとってどうなのかということも話題にはなりました。恐らくですけれども、探究活動の延長線上に進路を絡めた場合、大学に限りませんが、一つ考えられるのは、大学の総合型選抜が主流になっていく中で、探究活動によって身に付けたスキル、プレゼンテーション能力やコーディネート力などが生きてくるのではないかなという思いもありました。この探究という言葉の持つ意味が、中学生には、自分たちのスキルを手に入れるものと受け止められるのであれば、それは意味があるのかなと思ったのですが。亀井委員がおっしゃるように、中学生が普通に考えれば、国際の関係の学科なのだから海外に視点があるとか、語学力をがんばりたいとか英語が好きだという生徒たちが選ぶ学科になるのかなとは思いますが。事務局で検討させていただきたいと思います。

依田委員長 はい。お願いします。その他御意見はありますか。

長谷川副委員長 亀井委員の意見に近いのですが、結局、学科の名前は、保護者に分かりやすい、受検するだろう中学生にとって分かりやすい、イメージをしやすいものでないとなかなか生徒募集が大変になるだろうなと思います。具体的に代案があるわけではないのですが、できれば、こういう勉強をするのかというイメージが湧くような学科の名前にした方が良いのかなと率直に思っています。

依田委員長 それでは、学科名とクラス数はいかがでしょうか。7対1なのですが、もし御意見がありましたら、お願いしたいと思うのですが。

田中委員 今の岩槻高校も7対1なのでしょうか。

依田委員長 はい。

真中委員 新設校なので、区別化するためにも、7対1ではなくもう少し割合を増やすとか、例えば、基本理念に国際という文字もたくさんうたわれていますので、目指す学校や育てたい生徒像にもうたわれていますので、割合的には増やすのは可能なのでしょうか、それとも7対1で確定なののでしょうか。

依田委員長 確定はしていないのです。では、事務局が7対1にした理由を伺いましょう。

事務局 先程も少しだけ触れさせていただいたのですが、岩槻高校の志願倍率の状況等を考えると、ここでは国際文化科という学科ですので、国際に関する学科とは厳密には違うのかもしれないのですが、7対1でずっと募集してきている中で、国際文化科が志願倍率上厳しいときもありますし、好調の時もありますし、安定しているわけではないのですが、これを2クラスにした場合、倍の募集ということが果たして叶うのだろうかという私たちの課題意識がありました。もちろん、そこをメインに売りとして出していくという考え方も当然あると思いますし、そういったこと

も検討の中には含んでいくわけです。基本は、国際文化科という今の学科もホームルーム教室が普通にあって、特別な実習施設等が必要ということもあるかもしれませんが、施設上はこの建物の中で収まるのではないかと思います。建物としては8クラスが収まるので、その中での割合については検討の余地はあるのですが、今のところはこれまでの志願倍率等を踏まえて7対1と、新校としては、必ず志願倍率的にも1.0倍を超えた、地域の中学生や保護者から期待される学校という形で開校したいので、そのように考えているものです。

真中委員 逆に少数科なので応募しづらいということもあるのかなと思いますね。改めて、新しい学校として国際化、グローバル化を目指していく中で、今までの同じでやっていくのであれば何も変わらないです。改めて、新しい学校になるという感じがしないのかなと思いますね。基本理念が、教育像がもう少し見えていればもっと違うことを発想できるのかなと思いますけど。

依田委員長 普通科を志望する中学生が多いとの見立てなのでしょうか。

事務局 中学生における今の高校選びの中では、やはり普通科の志向は強いとおもいます。国際文化科は職業系の専門学科とは異なり、限りなく普通科に近い学科だと思のですが、今、埼玉県内の例えば工業、商業、農業の学科というのは、どれも生徒募集の厳しい状況が続いています。そういった意味でも、専門学科をどうしていくかという点も大きな課題になっていると私たちは考えているのですが、普通科志向が強い今の状況の中でも、魅力ある高校を作っていくって、中学生の選択の幅を広げていきたいという考え方はございます。

真中委員 メインは普通科ということでしょうか。

事務局 そのように考えました。

依田委員長 普通科と、仮称ですが国際探究科の関係性はどのようなのでしょうか。普通科は普通科のままなののでしょうか。普通科と国際探究科が、学びの中で融合するというか、混ざり合うような学びは想定しているのでしょうか。それとも普通科は、普通科の学校の普通科と変わらない学びをイメージしていますか。どういうふうに基本計画の中では話し合われていますか。

事務局 普通科と専門学科が併置されている学校のメリットとして、専門学科に専門の教員が配置されますので、その教員が中心となって受け持つ講座がいくつか出てくるのですが、例えば教育課程上、普通科の生徒も履修できるようにするとか、また、国際に関する学科ですので、海外との交流や地域での探究活動に国際色を入れ込むという学びを、普通科の探究活動でも広げていくとか、イメージがうまく表現できないのですが、普通科は、広く普くという意味で無色透明のところがあるのですが、そこに国際という色が染み出していくようなイメージでしょうか。併置をしている学校の効果はそういったところに出てくるのだと思っています。現在の岩槻高校についても、国際文化科の取り組みが全校に広がるようなことも当然あるでしょうし、国際色みたいなものが岩槻高校を特徴付ける一つの要因になっていると思いますので、教育課程の工夫によっては必ずしも学科ごとに壁で寸断されているのではなくて、いろいろな意味で、お互いが影響し合うということはあると考え

ています。

依田委員長 真中委員いかがでしょうか。

真中委員 はい。スタートは7対1。先程の倍率等を踏まえ決めたのですよというお話なのですが、将来的に普通科よりも国際探究科の倍率等が上がった場合には、クラスを増やすといったことでは考えられるのでしょうか。

事務局 はい。十分にあり得ます。

真中委員 分かりました、大丈夫です。

依田委員長 それでは、他にいかがでしょうか。

渋谷委員 蒸し返してしまうようで申し訳ないですが、また事務局を責めているわけではないのですが、このような取組をしているのは、埼玉県では6か所ということではよろしいでしょうか。

依田委員長 長く再編整備、学校の統合という形はやってきているのですが、昨年発表されたのが6か所です。そのうち国際に関する学科を設置するというものが半分の3か所です。ですから、似たような取組をする地域は3か所となるかと思えます。

渋谷委員 半分くらいが国際に関する学科をうたっている取組をされているとしたら、尖った方が良いと思えます。他の地域との違いを出すために少し尖った方が。当初は真中委員のおっしゃるとおり比率としては7対1かもしれないけれども、開校までに競争率が上がるような取組も必要かと思えます。競争率が上がるような施策ですとか、PRの方法を考えた方が良いのかなと考えております。プラスの発想で。最初から、今までの履歴から募集人員が少ないといったお話があったのですけれども、それをどうやって増やすかということを考えるのも一つかなと思えます。私の意見としては、国際探究科を、もう少し比率を上げた方が当初は良いのかなと思えます。たぶん、最初が一番肝心で、インパクトを与えられると思うのですね。学校を運営する上でいろいろと問題はあろうかと思えますが、インパクトを与えるという意味では、みんながそこに行きたいと思ってもらえるようなPR、施策を考える方が優先かなと感じたところです。

依田委員長 ありがとうございます。よろしいですか。

事務局 はい。ありがとうございます。

依田委員長 それでは、他にいかがでしょうか。

関根副委員長 岩槻高校の校長の立場からですと、学校規模の8クラス、これは妥当だと思っております。本校の校舎の実情からしますと、これを9クラス、10クラスに増やすことは不可能です。大規模改修をして校舎を作り直さない限り、又は、もう一つ校舎を作らなければ間に合わないので、8学級は妥当だと思っております。その中で、過去の岩槻高校の歴史を見ますと、国際文化科が設置された当初は2クラスでした。最初は生徒が集まったのですが、なかなか外国語、特に英語を中心としたという学科についてはなかなか人が集まらないところで、一時期、国際文化科も全て普通科にしましょうということを議論したこともあったようです。今回、第2期実施方策の中で国際感覚を身に付けたグローバル人材を育成する高校の設置の1校として岩槻新校があるということで、普通科の立ち位置も、この要素をしっ

かり教育課程等では入ってくるのかなと考えております。と言いますのも、現在の岩槻高校の普通科も一緒にやっているのので、例えば、こと文化センターという国際文化科で行っているものは、昨年度は田中委員にもお世話になりましたが、講演会など普通科含め全員が聞けるようにしております。今年度から再開します海外の高校との交流につきましても、普通科の生徒ももちろん希望できます。国際感覚を身に付けたグローバル人材の育成に関しましては、新校になっても引き継がれてほしい、つまり普通科の方でもそちらの要素があるしっかり特色ある普通科にしてもらいたいなと思っています。

依田委員長 それでは、学科名、クラス数についてはよろしいでしょうか。それでは、最後に全体を通してお話を伺いますので、この後何かあるようでしたら、そちらで伺いたいと思います。では、次に下にあります基本理念について御意見をいただきたいと思うのですが、まず、事務局から御説明をお願いいたします。

事務局 （岩槻新校基本計画骨子（案）のうち基本理念（目指す学校、育てたい生徒像）について説明）

依田委員長 それでは、基本理念の部分について、皆様から御意見をいただければと思いますがいかがでしょうか。

関根副委員長 目指す学校のうで、キャリアパスを見通した継続性のある創造的な学び、とありますが、このキャリアパスというカタカナ、専門用語についてどれくらい認識ができるのかなというところが心配なのですが、なかなかこういう言葉というものは、ピタッと当てはまる日本語がないので、意味合いとしては分かるのですが、事務局として、キャリアパスを見通したとはどういうことなのかということとを簡単に御説明いただけると良いのかなと思っています。

依田委員長 はい。お願いします。

事務局 確かにキャリアパスというフレーズは両校の案にはなかったものですが、事務局で検討させていただき、両校の案にあった意味合いをまとめるところでしようということで、キャリアパスという言葉を使わせていただいています。キャリアというのは、その方の長い生涯にわたってのいわゆる経歴といった、どういった学びを進めていくかということを含めたこと、パスというのは道ですので、それが続いていく、直線的なものかどうなのかといったことはありますが、そうした長い人生における生徒一人一人の将来にわたったキャリア設計、人生のステップを見通して、高校時代にこのような学びを実践するとか、地域とのつながりも深めて、その生徒の将来に是非生かしてもらいたいと考えています。そういうことを学校での学びとして進めていく中で、必要となる軸となるものと捉えて、このような表現にさせていただきました。

依田委員長 はい。委員の皆様もなかなかキャリアパスと聞いて、今のよう理解は難しいでしょうかね。本当は当てはまる日本語があれば一番良いのですがね。他にいかがでしょうか。では、事務局から。

事務局 先程言いそびれたのですが、この委員会に先立って行われている教職員や教育局の職員からなる新校基本計画検討委員会では、育てたい生徒像イに語学力とい

う言葉があるのですが、育てたいのは語学力だけではないのではないかと、語学に限定せずに、例えばコミュニケーション能力のようなもう少し幅のある表現でも良いのではないかとといった御意見は頂戴しております。

依田委員長 はい。今の事務局からの話について、皆様から御意見あれば頂戴したいのですが。よろしいでしょうか。そのとおりかもしれませんね。それでは、基本理念が終わりまして、2ページ、教育活動等の基本姿勢、教科指導に移ってまいります。こちらにつきましても事務局から説明をお願いいたします。

事務局 （岩槻新校基本計画骨子（案）のうち教育活動等の基本姿勢、教科指導について説明）

依田委員長 それでは2ページですね。教育活動等の基本姿勢と教科指導の部分につきまして、皆様から御意見をいただければと思います。いかがでしょうか。大砂委員お願いいたします。

大砂委員 仕事でSDGsの推進をしている部署ということもあり、気になったので発言させていただきます。具現化の才ですが、全ての教科でSDGsに関わる取組を行い、主体的・対話的で深い学びを実践する、というところですか。ここでは、全ての教科、という点にスポットが当たっているところですが、考え方として、SDGsは幅広い内容です。例えば、SDGs17における全ての開発目標の実践を目指した深い学び、ということで、教科全般にスポットを当てるのではなく、SDGsの中身、17の開発目標の幅広い中身の方にスポットを当てた取組にしても良いのではないかと思います。発言させていただきました。

依田委員長 事務局から何かありますか。

事務局 ありがとうございます。学校からの目線ですと、どうしても自分の教科の中ではどんなことができるのかなという考え方になりやすいので、今の御指摘は非常に教育の一つの方向性に刺激を与えてくれていると思います。ありがとうございます。検討させていただきます。

依田委員長 大砂委員よろしいでしょうか。はい。他にいかがでしょうか。

関根副委員長 私も先程の御意見に賛成です。高校からしますと、実施方策の基本方針で、SDGsなど地球規模の課題の探究活動に取り組みます、と銘打っているのでそこは崩せないと思いますが、じゃあ新校でどういうことをやるのという内容がよく分からなくて、企業としてのSDGsの考え方もあると思いますが、さいたま市は先行して小・中・高でSDGs教育を実践されているので、特に岩槻高校はさいたま市立中学校からの入学者も多いので、そういったSDGsの取り組みが継続、更に発展できるような新校でありたいなと思いますので、具体的な御意見等も盛り込んでいただくと有り難いと思います。

依田委員長 さいたま市立の中学生が受検されるというお話がありましたが、亀井委員から、SDGsについて中学校の取組を紹介いただけるようなものがあれば、教えていただければ嬉しいのですが。

亀井委員 今の学校におけるSDGsに関わることについては、まだ見えていないところもあります。少し視点が違うかもしれませんが、全ての教科でSDGsに関わ



る取組を行う、という文言を見ると、これは難しいのではないかなと率直に思っています。SDGsの取組みを行うに当たっては、教科横断的に、全ての教科の枠を取り払って行うものなのかなと私は捉えています。例えば、国語の教科でSDGsに関わる取組、もちろんできる部分はありますが、それぞれの教科でSDGsの取組というものは、私が中学校で行っている取組で考えると、教科の指導があまりできなくなってしまうなというイメージがあります。全ての教科で得た知識を、教科横断して、枠を取り払った上でやるのがSDGsの取組なのではないかというイメージは持っております。具体的にどういことをやるのか見えてこない部分もありますが、難しそうだなという感じを受けました。

依田委員長 事務局からありますか。

事務局 今、御指摘いただいたとおり、確かに教科・科目の枠を超えていかなとなかなかそういった学びにつながらないということはあると思います。そのため、教科指導の具現化のAに、横断的な学びを推進するということ、は記載してはいるのですが、下の記載とのつながりという意味では、その手法をどのように考えていくのかというところが、具体性が出ていない部分がありまして、文言としては未成熟な感じは確かにあります。実際の文言化の際に練りたいと思います。

依田委員長 はい。お願いいたします。教科指導のところですが、いかがでしょうか。

他にありますか。それでは先に進ませていただきたいと思います。3ページ目です。生徒指導になります。こちらの方も事務局からお願いします。

事務局 (岩槻新校基本計画骨子(案)のうち生徒指導について説明)

依田委員長 はい。生徒指導につきまして、皆様から御意見いただければと思います。

長谷川副委員長 特に、具現化ウとオのところで、この点は是非しっかり取り組んでいただければと強い思いはあります。今、岩槻北陵高校でも、近くの小学校と朝の挨拶運動だとか、部活動の生徒が小学校で交流を深めたりする取組を行っていますが、とても好評です。そのため、地域に密着するだとか、地域の信頼を得るとするのは、とても大切なことだと思いますので、ウの部分については、とても大切だと思っております。それから、オの部分ですが、コロナの影響もあったのかもしれませんが、本当に今、いろいろな学校で課題を抱えている生徒がいます。私自身は11校目の学校となるのですが、どんな学校でもカウンセラーの派遣をお願いしたり、ソーシャルワーカーに来ていただいたりするケースが多いです。教育相談体制やカウンセリングマインドは、これからの時代ますます不可欠になっていくと思いますので、是非重点的に取り組んでいただけると有り難い、時代の要請かなと思います。よろしくお願いいたします。

依田委員長 事務局よろしいですか。こちらについては。

事務局 1点だけ。説明させていただいたオですが、話題になりましたカウンセリングマインドという言葉について、余り聞きなれないという御指摘を他の委員会で受けました。こちらは、埼玉県教員であれば誰しもが知る言葉なのですが、一般の方からすると、ちょっと何だろうと思われるかもしれませんので、簡単に説明させていただきます。こちらは、スキルや何かの資格ではなく、そういう心持ちでいま

しょうという意味合いのものです。教員に対する研修の中で、教育相談という研修をしっかりと積ませていますし、そういった経験をさせる中で、常に生徒に寄り添って、心の様子をカウンセリングするような姿勢で生徒と接することが、全ての教員には心得として教え込まれています。学校職員はこちらを見て意味が分かりますが、一般の方からするとカウンセリングマインドとはいったい何かというお話があるかもしれないので、紹介させていただきました。

依田委員長 皆様から他にいかがでしょうか。よろしければ3ページを終わりにして、4ページを御覧いただきながら、進路指導について事務局からお願いいたします。

事務局 (岩槻新校基本計画骨子(案)のうち進路指導について説明)

依田委員長 はい。それでは進路指導について皆様から御意見賜りたいと思います。いかがでしょうか。

関根副委員長 気になっているところとして、具現化のウの文言で、こちらの各種資格につきましては、教科指導の方でも、英語に関する資格を具体的に記載しているので、進路指導については何も英語だけでなく、他にも各種資格がありますので、英語に関わるということで限定しなくても良いのかなと思っております。同じ箇所、体制を充実させ、自らの進路実現ということで、多く広く捉えることは可能なのですが、基本方針のウの中で、望ましい勤労観、職業観、つまり、これから岩槻新校にどのような生徒層が来るのかははっきり言えませんが、恐らく進学を希望する生徒もいれば就職や公務員を希望する生徒もいると考えれば、多様な進路希望の実現に向けた、ということで、進学はもちろんいますが、それ以外の生徒についてもしっかり進路指導していくという姿勢が、表現としてあった方が良いのかなと感じております。あと、具現化のイに、私立中堅大学、という表現ですが、いろいろ調べたら、中堅私立大学の方が多く使われているようなので、中堅私立大学の方が一般的なのかなと感じております。

依田委員長 今の御発言ですが、事務局から何かありますか。

事務局 こちらも先に行われました新校基本計画検討委員会で、ほぼ同様の意見が出ておまして、英語にこだわらなくても良いのではないかと、もっと幅広に考えて良いのではないかと御意見はいただいております。

依田委員長 大学進学にこだわらず、一人一人の多様な進路選択をとる御意見について事務局としてのお考えはありますか。

事務局 はい。そのとおりだと思っております。少し表現が大学進学に寄りすぎている印象は確かにありますので、文言化する際にはしっかりと整理していきたいと思っております。

依田委員長 はい。お願いします。先程、関根委員より、私立中堅大学と御発言がありましたが、中堅大学というのは、なんとなくイメージできる中堅大学はありますか。いかがでしょうか。PTA、同窓会の皆様。分かりませんか。言葉として、中堅というのはいかがなものなのでしょうかね。

事務局 そうした意見も新校基本計画検討委員会の中でもありました。中堅と言っても受け止め方は人それぞれではないのかと。分かりやすく言ってしまうと、学習塾

や予備校が使う用語としては分かるのですが、新しい学校の基本計画に盛り込む文言としてはどうなのでしょうかという意見は確かに出ておりましたので、何かうまい表現に、意図をうまく代えられたら良いかと考えています。

依田委員長 そうですね。何々から何々まで、という表現だと上下関係を作るようなイメージもあるので、少し工夫があっても良いかもしれないですね。委員の皆様、他にいかがでしょうか。それでは先に進ませていただきたいと思います。ここまで、教科指導、生徒指導、進路指導という、いわゆる学校の教育内容についてひと通り御意見をいただいてきたのですが、ここまでで、まだ御発言いただいていない委員から御意見があれば、いただきたいと思います。石井委員、何かございますか。

石井委員 教科指導のところに関わってくるかと思うのですが、例えば、教科指導の具現化のイを見ると英語の検定試験があります。授業の中で、英語以外の言語も教育活動に取り入れていく構想があるのか、お聞きしたいのですが。

依田委員長 はい。お願いします。

事務局 こちらは現在の岩槻高校の取組などを継承するような表現かと思うのですが、国際に関する学科においては語学を学ぶことが最終的な目的ではありませんが、語学を一つのツールとして、国際的な様々な学びに繋げていこうと思っただけの記載になっています。今は小学生から学んできている最も身近な外国語が英語になりますので、そのことが、こういった取組になっているのかなと考えています。例えば、教育課程上どういったカリキュラムにするかはこれから検討していくことになるのですが、第2外国語を用意し、その語学の力を検定試験で試していくというのも手法としてはありだと思います。ここでは、英語の検定、いわゆる実用英語検定のことですが、それを取り組む学校の姿勢を続けていきたいということが主なところだと思います。

依田委員長 いかがでしょう。よろしいですか。

関根副委員長 ちなみに現在、岩槻高校では選択科目で中国語、韓国語、スペイン語を2年生、3年生で2単位ずつ置いています。スペイン語については今年度、特別非常勤講師でネイティブの方に来ていただいています。英語に限らず幅広くできるカリキュラムになっております。

依田委員長 はい。それでは山口委員、いかがでしょうか。

山口委員 P T Aということで、保護者、親の立場から意見を述べると、文言の話になってしまうのですが、難しい英語等が並んでいるのですが、もう少し分かりやすい言葉ということで、ルーブリックという言葉もあるので、そうしたものは分かりやすい言葉で表されると良いかなと思います。

依田委員長 これは、事務局の方でよろしくお願ひしたいと思ひます。はい。手島委員ありますでしょうか。

手島委員 教科指導の基本方針のうで、これは個人的な感覚なのですが、ここだけ言い回しが、関心を持たせるとか、身に付けさせるといふ、せる、させるという表現になっており、他では余りこういった表現が出てこないのだから、感覚でおこがましい

のですが思いました。あと、同じところで、具現化のウに、一人一台端末を活用とありますが、恐らく当たり前になっているのではないかなと、わざわざ書く必要があるのかなと思いました。その頃には我々が想像できないような、もっと新しいものができているのかなと、時代の古い言葉になっているのではないかなと感じました。後、生徒指導の基本方針のアで、私だけかもしれませんが、生徒理解という4文字の言葉があるのですが、教職員の中では成熟した言葉なら良いのですが、私は一般的には生徒理解という言葉がどういう意味なのかなと、生徒の理解する力を指すのか、それとも、一人一人の生徒を教職員が理解していこうということなのか、どちらなのか分かりづらかったなと思いました。後、進路指導のところ、具現化のイで、進路担当を中心に全教員が、とありますが、進路指導をするのが教諭の職務だとしたら良いのですが、他の項目では教職員という言葉を使っているのですが、ここは教員という教諭に限定しているので、これが教諭の職務なので教員で良いのであれば結構なのですが、少し気になりました。

依田委員長 踏まえていただきたいことと、御質問の部分が合ったかと思えます。御質問の部分として、生徒指導の生徒理解、進路指導の教員という部分について、事務局からいかがでしょうか。

事務局 ありがとうございます。使役の表現がここだけ違和感があるというのはごもっともでして、それぞれ言葉が練れていないと思えます。同じような御意見が、基本計画検討委員会でも出ていて、表現の揺らぎが散見されますので、骨子案から基本計画の文言に直す際には統一できればと考えております。また、一人一台端末というフレーズについても、確かに今や当たり前の話になっているのはごもっともでして、ICTの活用にプラスアルファのような、この先の野心的な取組を入れられると良いなと思っております。先ほど紹介させていただいた遠隔などの取組をもう少し分かりやすく載せていくべきなのかなとも思った次第です。それから、生徒理解という生徒指導に出てきている用語ですが、これは学校現場では割とよく使われる言葉で、教職員が生徒をしっかりと理解するという意味合いです。内部的に使われている言葉を注も入れずにそのまま使っているので、場合によっては注釈を入れる必要があるかもしれないなと思っている次第です。あと、教員、教職員、学校職員といろいろな言い方があるのですが、これも確かに表現に揺らぎがある部分ですので、こちらも文言化までには整えていきたいと思えます。御指摘ありがとうございます。

依田委員長 全教員は教職員に変わるということですか。それとも逆ですか。

事務局 進路指導という狭い意味で言えば教員ですが、例えば事務職員が働いている姿を生徒に見せることが進路指導に繋がるということであれば、学校の職員全体かもしれませんが、もう少し精査していきたいと思えます。

依田委員長 分かりました。ご検討いただきたいと思えます。池田委員ございましたらお願いします。

池田委員 生徒指導のところ、特に意見や質問というわけではないのですが、新校準備委員会ということですが、北陵高校は統合されることになりますので、今まで

北陵高校に来ていた生徒たち、どういった学校像になるのか心配してしまして、その中で基本方針のあの、生徒理解に基づき多様な生徒に応じた指導や、先程ありましたカウンセリングマインドといった表現が入っていることに安心しました。

依田委員長 岩槻北陵高校のこれまでの優れた取組があると思いますので、基本計画に盛り込んでいただきたいと私からも思います。それでは、最後の5ページを御覧いただきながら事務局から御説明をいただきたいと思います。

事務局 (岩槻新校基本計画骨子(案)のうち生徒募集、その他について説明)

依田委員長 それでは、5ページですね。生徒募集、その他の部分でございます。皆様から御意見をいただければと思います。では、手島委員。

手島委員 質問があります。生徒募集を公にできるスケジュール的なことなのですが、恐らく県立学校の設置条例の一部改正が議決をされて、公布、施行されて初めて効果を発するのではないかなと思うのですが、そのタイミングと考え方、生徒募集はいつからできるのか、あるいは公に新校の名称であるとか設置場所が条例改正で定まるでしょうか、これはいつになったら定まるのか、公布時期はいつと考えておられるのかを教えてくださいたいと思います。

依田委員長 それでは、事務局の方からお願いいたします。

事務局 学校の設置については、埼玉県学校設置条例がありまして、御指摘いただいたとおり、そこに新しい学校の校名と住所が記載されることとなります。そこに載って初めて新しい学校ができることとなりますが、第1期の児玉新校と飯能新校の時を例にお話をいたしますと、開校の前年の埼玉県議会6月定例会に条例改正が議案として上程されまして、条例の施行日は開校の年の4月1日です。つまり今年の4月1日だったのです。それを待っていたのでは、生徒募集ができなくなりますので、通常は、ほぼ同時期に翌年度の生徒募集に関する教育委員会規則が改正されます。そこでは、どこの高校ではこれだけの生徒募集を行いますという募集人員が載ってくるのですが、それがほぼ同じ6月頃が例年のことです。本来はそこに載せる際に、条例により決まった校名を出せれば良いのですが、前回の児玉新校と飯能新校の場合には、まず一旦募集人員を仮称のまま出して、その後で校名を変えるという二段階で改正をしました。いずれにしても、前年の6月から7月くらいでした。こちらが実績です。この先も同じようなスケジュールかどうか決まったわけではないのですが、同じようなスケジュールを考えているので、少し話は逸れますが、皆様方には、令和6年度には新しい校名についての御意見を頂戴する場を設けさせていただいて、令和7年6月定例会に知事が議会へ条例案を提出し、校名案を決めます。そうした流れに皆様にも参画していただくことになるということです。

依田委員長 手島委員よろしいですか。その他、御意見ありますでしょうか。では、池田委員お願いいたします。

池田委員 具現化オのところですが、選抜基準に関する記載がありますが、岩槻北陵高校に今までどういった生徒が入学していたかも考えて、選抜基準は考えていらっしゃるのでしょうか。統合になるので、どういう子供たちが来ていたかを考えて、例えば、言い方が難しいのですが、学力が低いけれども今回の学校の特色を見て、

ぜひ入学したいという子供たちにもチャンスがあるのかというところです。どういった選抜基準になりますか。

依田委員長 まず選抜基準とはいかなるものか、という説明からお願いした方がよろしいですね。

事務局 選抜基準と言った場合に、県民の皆様それぞれの高校の入学選抜において、例えば調査書の扱い方はこうですか、学力検査は500点満点なのですが、それをどういうふうに点数化していくかなどを、それぞれの学校が決めることになっています。それを毎年公表しております。春先の5月から6月頃の公表されるのですが、そこには、この点数までの人が合格するといったような基準を示すのではなくて、先程申し上げたように、志願者が持っている調査書の内容とか、あるいは当日の学力検査での点数をどう扱うかを示すものです。それから選抜方法についても一次選抜、二次選抜と順番があるのですが、一次選抜ではまずどういう受検生が合格となるのか、二次選抜では次の段階として、あらためてどういう受検生を合格とするのかということを各学校が設計することになっています。一定の点数などで基準を設けているわけではなくて、選抜の仕方などが詳しく書かれるというものになります。2校の統合ということになるのですが、実際にどういう学力層の中学生が受検することになるかということが御質問の意図かと思うのですが、このくらいの点数の子供たちを合格させるとあらかじめ決めて選抜を行うというものではありません。最終的には、新校に入学した生徒たちが、振り返ったときに、どれくらいの点数で集まってきたのかというところで、最終的にどれくらいの難易度の学校というのが決まってくるものです。難易度を先に決定して、高校入試が行われるわけではないのです。私たちも開けてみないと分からないという思いではあるところです。基本的には、新校基本計画でこういう新しい学校を作ります。ついては、中学生に募集をかけて、是非この学校に進学したいという生徒達が集まるものであり、その結果、最終的に世間が言うところの難易度や偏差値になってきます。選抜基準は、入試のやり方を示すものなので、入試の難易度を先に決めるわけではないということになります。質問の答えになっていないかもしれませんが。

依田委員長 一般論ですが、どうしても、倍率が出なくなると入るのが難しくなくなります。その点は正直、学校側でもどうしようもない部分と言いましょか。学校側としては魅力ある学校にしようとする、そうして人気が上がって倍率が高くなると成績的に自然と難しくなってしまいます。学校の子供にとって良い教育をしようとする努力によって、倍率が高くなることで、成績的にも上がっていくという、あくまで一般論ですが、そういった部分がどうしても出てきてしまうのです。ですから、新校についても、一定の倍率を出す良い学校にしよう、委員の皆様からの御意見もいただきながら努めるのですが、その努力が逆に学力的には入りづらい学校になっていく可能性はどうしてもはらんでいってしまう部分があります。事務局の説明にあえて付け足すと、矛盾みたいな部分はあるのですね。本当は多様な子供たち、この学校で学びたいという子供たちに来てもらって、この学校の学びで多様な進路に進んでいくのが一番ではあるのですが、どうしても入試という制度がある

のでどうしようもないところがあるのですね。奥歯に物が挟まったような言い方になっているのですが、御理解賜ればと思います。

長谷川副委員長 私たちは選抜基準をこう解釈しているのですが、例えば、いろいろな学校において、例えば学力検査を重視しますという学校もあるし、中学校からの調査書を重視しますという学校もあるし、ざっくり言うとそういうことかと思えますし、例えば、中学時代に取得した資格を重視しますという学校もある。そういう大まかな部分で捉えていただければ良いと思っています。例えば、具体的には、英検何級を持っているとか漢検何級を持っているとか、そういうところで特色を出した選抜基準を設けるというイメージで良いのかと思います。偏差値どうこうとは全く別の問題です。後は、中学校1年生から3年生までの調査書の扱いを、学校によっては1対1対1だとか、別の学校では1対1対2とか。そういうものを基準として、今後、学校の特色を踏まえながら考えていきたいと思いますということだと思います。

依田委員長 仕組みとしては、ただいま御説明にあったとおりです。大変大切な部分だと思っていますので、皆様から引き続き御意見をいただきたいと思っています。私からいいでしょうか。外国にルーツがある子供たちについて、生徒募集の観点で、新校基本計画検討委員会では意見はあったのでしょうか。

事務局 はい。そういう実態があるということは、それぞれの学校から声として上がりました。実際の入試の制度では、岩槻高校に外国人特別選抜という、県教育委員会として幾つかの学校を指定して、外国人の方の入試をやっています。通常は英数国理社の5教科でやるところを3教科にして、場合によってはルビが入った問題用紙を用意したりすることで、外国の生活が長かったり、日本に来て日が浅いなどで、なかなか日本語の能力が厳しいという、外国にルーツがある、あるいは外国につながる生徒への受検の機会を設けようとしているものです。そちらを新校において継続するのか、あるいは新たな別の仕組みを考えるのか、そういったところは今後の検討だと思いますが、現在の岩槻高校のやり方を続けていくということが一つあるかなと思っています。

依田委員長 すみません。私からの質問でした。皆様からいかがでしょうか。それでは、時間も少し過ぎてしまいました。全体を通して、皆様から御意見ありましたらお願いいたします。それでは、これで基本計画の策定に入ってまいります。委員の皆様からいただいた意見を踏まえて、事務局にはよく検討していただければと思います。ありがとうございました。